非漢字系日本語学習者の漢字未知語の意味推測における統語情報の利用
ー中上級学習者のケーススタディよりー

桑原陽子

要旨

本稿では、非漢字系日本語学習者の漢字２字熟語（漢字語）の意味推測過程を観察し、意味推測失敗の原因について、特に、統語的な推測を生む文脈情報との関わりから考察を行う。意味推測が成功した事例を観察すると、助詞の用法に注目し文の構造を正しく把握することが重要であることが確認された。それらの事例をもとに、未知語を含む文の読みに必要な文法的知識を具体的に記述する。

キーワード：漢字語　意味推測ストラテジー　非漢字系日本語学習者

１．本研究の目的

中級以降の非漢字系日本語学習者は基本的な漢字学習を終了しているが､生の素材を読む上で、未習の漢字語彙に遭遇することは避けられず、漢字語彙の意味を推測しながら読む技術が重要になる。そのため、読みの指導・支援を行うためには、学習者が読みの過程でどのような意味推測ストラテジーを用いているかを知る必要がある（e.g.,松本,2002,2004)。

英語圏日本語学習者を対象にしたMoriの一連の研究（e.g.,Mori 1999,2002,2003）では、語と文脈双方の情報を利用することで漢字語彙の意味推測の成功率が高まり、どちらかだけに依存すると誤った推測に陥ることが示唆されている。Mori＆Nagy(1999)は、単語要素と文脈の情報の適切な統合が意味推測の成功につながるとしている。また、統語的な推測を生む文脈情報と意味的な推測を生む単語要素（漢字）の情報の効果は加算的であるが、それを適切に活用できない学習者が多いことが指摘されている(Mori,2002,2003)。

統語的な推測を生む文脈情報としては、例えば、加納（1992）が指摘する読解のストラテジー「表記に注目し、かたかななら外来語、ひらがななら助詞、副詞、接続詞など、漢字と送り仮名であれば､その送り仮名によって動詞か形容詞かを類推する」のようなものが挙げられるだろう。また、Nation(1990)では、意味推測のストラテジーとして「未知語に注目して品詞を特定する」「未知語を含む節や文に注目する」「未知語を含む節や文と他の文や段落との関係に注目する」などを挙げている。

本研究では、中級以降の非漢字系日本語学習者を対象に、文脈のある状況で未習の漢字語彙に遭遇した時、その意味についてどのような知識を利用して推測し、それをどのように文意の推測につなげていくのかを、学習者の内省報告の記述を用いて観察する。漢字語彙の中でも、漢字２字から成る漢字熟語（以下、漢字語とする）に焦点をあてて、意味推測の過程を記述する。特に、意味推測に失敗した事例をできる限り詳しく記述し、前述した加納(1992)、Nation(1990)らの指

摘するストラテジーがどのように使用されるべきであったかを観察する。

なお、漢字語の意味推測に関わる要因として、漢字語を構成する個々の漢字と単語全体の意味との結びつきが挙げられる。例えば、「月光＝月の光」のように、語を構成する漢字から単語の意味を推測することが可能である。しかし、漢字どうしの結合関係の透明度は連続的であり（小林, 2004)、大部分の漢字語は「単純語に近い合成語である」(日本語教育学会, 2005）ことから、個々の漢字の組み合わせで単語の意味が説明できないものが多い。Mori & Nagy (1999)は、これを意味の透明性(semantic transparency)とし、漢字熟語を構成する漢字の意味が語全体の意味と結びつくもの（semantically transparent words, 例：月光）から、まったく結びつかない不透明な語（semantically opaque words, 例：皮肉）までを５段階尺度評定した上で調査材料の選定を行っている。

しかし、本研究では、調査に使用する漢字語については意味の透明性をコントロールしない。意味の透明性の低い語であっても統語情報などの利用によって意味推測が成功する可能性もあり、逆に意味の透明性の高い語であっても意味推測に失敗する場合もあると予想でき、それらの個々のケースについてできるだけ詳細に観察したいと考えるからである。この調査によって、中級以降の非漢字系日本語学習者が読む過程において必要な意味推測に関わる知識と技術とは何かを具体的に明らかにしたい。

２．調査概要

被調査者　非漢字系日本語学習者３名（中級～上級）であった。それぞれの国籍と調査開始当時の日本語学習暦、日本滞在年数を以下に記す。全員日本のＦ大学の留学生であり、中級・上級の判定はＦ大学で実施した日本語プレイスメントテストの結果による。日本語力は、学習者Ｃが最も高く、学習者Ａが最も低い。ただし学習者Ａも調査開始当時、学部２年生の後期であり、日本語で意志の疎通を図るのに全く問題はなかった。また、全員が日本語を学習する以前に漢字の知識を持っていなかった。

・学習者Ａ（マレーシア）中級　日本語学習歴３年８ヶ月　日本滞在１年８ヶ月
・学習者Ｂ（マレーシア）上級　日本語学習歴５年８ヶ月　日本滞在４年８ヶ月
・学習者Ｃ（ドイツ）上級　日本語学習歴３年２ヶ月　日本滞在２ヶ月

調査材料　150～200 字程度の日本語の文章で、雑誌、新聞からの抜粋が中心であった。調査に使用した文章の数は、学習者Ａが 10、学習者Ｂが 18、学習者Ｃが 16 であった。

調査方法　個別調査であった。2007 年 11 月から 2008 年４月まで、約２週間ごとに実施した。調査の概要は次の通りである。

１）被調査者に課題の文章を渡し、内容を理解するため数分間黙読させる。
２）被調査者に文章を音読させ、漢字語の読みを確認する。間違った場合、読み方がわからなかった場合も訂正はせず、正答は教えない。
３）最初から１文ずつ意味を説明させる。説明は、日本語でも英語でもよいこととした。調査者は適宜、漢字語の意味を確認し、なぜそう考えたか説明させる。調査中はほとんど日本語が

使用され、日本語の単語が出てこない時に、学習者ＡとＢが数回英語単語を使用したのみであった。

４）文章中の意味のわからない単語、初めて見た単語を報告させる。

５）調査者が単語、文章の意味について解説する。

３．調査結果

漢字語の意味推測について、観察された事例をまとめる。

３－１．漢字語の意味推測の失敗

被調査者が「漢字語を構成する漢字２字とも既知である」と回答したものの中から、意味推測に失敗した主な事例を、その要因別に①から③にまとめた。（　）内のＡ、Ｂ、Ｃはその誤答を産出した学習者を示す。

①　字形の誤認識

例1-1)　著名→「著」を「若」と間違え、意味推測不可能（Ａ）

例1-2)　奨励→「将妨」と間違え、「将来何か妨げられる・支障が出る」と意味推測（Ｂ）

②　漢字の意味の組み合わせの失敗

個々の漢字の意味を正しく把握しているのにもかかわらず、漢字語全体の意味を正しく推測できなかったものである。

例2-1)　少女→女の人が少ない（Ａ）

例2-2)　抱負→「抱く」＋「負ける」。語の意味はわからない。（Ｂ）（Ｃ）

例2-3)　集落→集まる人が落ちる。つまり、集まる人が減ること。（Ｂ）

例2-4)　前身→からだの前の部分（Ｃ）

③　漢字の意味の把握の失敗

個々の漢字の意味を正しくとらえられなかったことによる失敗の事例を示す。

例3-1)　流動（化）→「流」は「流体力学」と同じ。「動」は「動く」という意味だから何か科学研究の１つ（Ａ）

例3-2)　個展→１つの展覧会。「個」が特定の個人ではなく「１つ」という意味だと思った（Ｃ）

例3-3)　女優→「優」は大学の成績判定で一番いい成績だから「偉い、すばらしい女の人」（Ａ）

例3-4)　支出→「支援」を「出す」、つまり支援すること。

例3-5)　調理→「調 investigation」＋「修理 repair」。文脈に合わず無視。（Ａ）

なお、３字以上の漢字語で、漢字語の切れ目の間違いが１例見られたので補足的に記載する。

例 4-1)　　米社交界→「米社」＋「交界」。「米社」はアメリカの会社。「交界」がわからず、全体の意味もわからない。「社交」は未習。（B）（C）

まず、①「字形の誤認識」の事例は、日本語力が低い学習者Ａに多く、この他にも多数観察された。字形を正しく記憶すること、類似した形態や共通の構成要素を持つ漢字との弁別がいかに難しいかがうかがえる。

②「漢字の意味の組み合わせの失敗」も事例が多い。これは、漢字語の意味の透明性の低さが大きく影響していると考えられる。例示した単語はいずれも透明性が低く、漢字の意味を組み合わせのみで単語の意味を推測することは非常に困難であろう。

また、③のように、個々の漢字の意味を適切に抽出できず、その漢字を含む単語しか想起できない傾向も観察された。特に学習者Ａは、語中の漢字を自分の身近な漢字語彙とすぐに結びつける傾向があり、それが必ずしも漢字の中心的な意味ではないため、誤った意味推測に陥るケースが観察された。例えば、例 3-1 の「流動（化)」について、「流」がついているという理由で「流体力学」と強引に結びつけ、特定の専門領域であると推測した結果、文意の正しい理解が全くできなかった。また、事例には例示していないが、学習者Ｂは「懇願」の「願」について、「お願い」という単語を知っているにもかかわらず「願書」を想起したため文脈と結びつけられず、全く意味推測ができなかった。これらは、漢字の中心的な意味をとらえながら語彙のネットワークを拡充していくことの重要性を示す事例であろう。このような事例は、桑原(2009)でも多数観察されている。

これらの事例は、文脈の利用ができていないという点では、漢字への依存度が高い意味推測（overreliance on Kanji：Mori,1999）であると言える。実際、構文情報を含む文脈を生かせず、誤って導き出された漢字語の意味を文脈と無理に結びつけ、誤った推測が強化された事例が多数見られた。つまり、漢字に依存した意味推測の結果を文脈の活用によって検討・修正するのではなく、逆に文意が曲げられてしまうのである。このようなケースは、特に学習者Ａで観察された。

一方、漢字語だけでは意味推測が不可能な場合でも、文脈からの意味的情報、統語的な推測を生む構文の情報を利用することによって意味推測に成功している事例が観察された。次項では、文脈の利用と併せて推測過程のその具体的な事例を詳細に見ていく。

３－２．構文情報の活用と意味推測

[　　]は、調査に使用した文章で、[　　]は学習者の解釈である。斜体は学習者の内省をまとめたものである。意味推測が必要であった漢字語を□で囲み、意味推測が誤っている部分を下線で示す。

事例１）

自発的に医療機関を訪れて受ける個人的なもののほかに、国民全体の健康維持のために行政的に行われるものがある。

個人的に病院へ行く機会で、全部の体の病気をチェックする。これは政府の命令である。*「全部の体」は「国民全体」の「全体」だけからそう考えたが、後で「国民」に気がついて「国民全部の人」と修正した。「行政的」は「政府の命令」という意味だと思う。*（A）

まず「機関」を「機会」と誤解した。それに合わせて「機関を訪れる」を「行く機会」と解釈している。その結果、文の構造が原文から大きく変わっている。これと対照的な学習者Ｂの解釈を示す。

自分の意志で医者のところ、つまり病院とかクリニックとかを訪ねて受ける診断と（後略）。*機関は「機械の関係」の何かだと思ったが、「医療」とどう結びつけたらよいのかよくわからないのでその推測にこだわるのはやめた。「～を訪れる」という語があるので、「を」の前には訪れる場所が来るはずだと思った。それで、「医療」を利用して「医者のところ」つまり「病院とかクリニック」が正しいかなと思った。*（B）

学習者Ｂも「機関」の意味がわからず、最初は「機械の関係」という本来の意味とは大きく異なる推測を行っていたが、「～を訪れる」に注目することで、意味の修正を適切に行っている（傍点部分）。これは、適切に構文情報を活用できた好例である。

事例２）

しかし、不幸なことに、それ以来今に至るまで薄幸な少女という初演の印象から脱皮できない。

ところが、この人はあまり幸せではない（不幸）。女の人が少ない。（A）

「薄幸な少女」は「薄幸」と「少女」の間に「な」があり、「薄幸」が「な形容詞」であると容易に推測できる。そこから、「少女」は被修飾語の名詞であることも推測可能だが、それが意味推測には生かされていない。なお、「初演の印象」以降は全く文意を理解することができなかった。

また、この文では、学習者Ｂ、学習者Ｃが未習の「脱皮」に対して、それぞれ異なった解釈をしているので、それを記す。

しかし、この役を演じてから、かわいそうな少女というイメージがあるから、イメージが変わるから勝手な役ができない。例えば服を脱ぐような役（ヌードになるような役）はできない。だから幸せじゃない。（B）

しかし、不幸なことですが、それから今日まで「不幸な少女」という初演の時のその役から他の役を演じることができるようになることができない。（C）

学習者Ｂは「脱皮」を「脱ぐ＋skin」とし、文脈から「服を脱ぐような役をすること」と推測した。この誤推測の原因について学習者Ｂは、「初演の印象から」の「から」は理由を示すと思ったので、「印象から脱皮」をひとまとまりにとらえられなかったと報告している。

一方、学習者Ｃは、「脱皮」について「蛇が皮膚を落として新しい皮膚ができること」と意味推測し、「初演の印象から」の「から」を「脱」と組み合わせることによって「変化前の状態を示す」と捉え（傍点）、「その役から他の役を演じることができるようになること」と文脈に合わせて解釈している。すなわち、「脱」と助詞「から」を結びつけられることが推測成功のかぎである。そのためには、Ｃのように意味的な推測をすることが必要であろう。それに加え、「○○から」の○○が漢字語の場合は、「から」は理由を示す可能性が低いという知識も、推測の成功を高めるために有用ではないだろうか。

事例３）

再就職支援会社の役員から転身して１年余。

再就職支援会社で役員と一緒に１年ぐらい働いた。*「役員」という言葉があって、後ろに時間（１年余）があるから「働く」という意味だと思った。*（A）

「転身」の後ろに「して」がついており、「転身して」が動詞であると見当をつけられたこともこの推測を後押ししていると考えられる。ただし、「役員と一緒に」という意味なら、「役員」の後ろは「から」ではなく「と」でなければならない。「から」が「変化前の状態」を示すことに留意すれば「働く」を候補から除外することができたのではないだろうか。ここでも、助詞の情報が活用されていないことがうかがえる。

事例４）

24 日午前０時ごろ、長野市安茂里小市、無職、宮尾大森さん（79）方から出火、木造２階建て住宅約 165 平方メートルを全焼した。焼け跡１階南西付近で２人の遺体が見つかった。

宮尾さんと妻の武子さんの行方がわかっておらず、長野中央署が身元確認を急ぐとともに、出火原因を調べている。

24 日午前０時ごろ、長野市の大森さん 79 歳は火事から無事に出た（逃げた）。*「出火」は「火事から出る」という意味。*彼のうちは木から作っていて、２階。高さ 165mを完全に全部焼けた。

１階南西の近くで２人が見つかった。*１階に住んでいる人だと思う。この人たちは生きていると思う。遺体の「遺」はわからないから無視。*宮尾さんと女の人２人は火事のときに煙があって方向がわからなくてやみくもに逃げた。長野中央署はこの２人にいろいろ確認して、火事の原因を調べている。（A）

文中に「出火」が２つ出てくるが、１つ目は「火事から出る、火事から逃げる」、２つ目は「火事」と推測されており、同じ単語であることには気づいていない。２つ目の「出火」は、「原因」と結びつけやすかったため「火事」と推測したと考えられる。一方、1 つ目は、直前の「宮尾大森さん方から」の「から」に注目すれば、「宮尾大森さん」が「出る」の主語であるという推測は避けられるはずで、この誤推測は人名「宮尾大森さん」と「出」「火」の意味を適当に結びつけた結果であろう。構文が分析的にとらえられていないことがうかがえる。

２段落目の「行方」は「方向」と推測されている。これは大きな間違いではないが、「宮尾さんと妻の武子さんは、方向がわからない」という解釈は「誰が何をわからない」のか正しく把握されていない。一文目で「宮尾大森さんは生きている」と解釈したことにも影響を受けていると考えられる。しかし、「A（人）のBがわからない」という構文の場合、Aが「自分」以外の場合を除いて「わからない」の主語とはならないはずである。このような構文についての知識が利用されれば、「方向」を「どこへ行ったか」と解釈し直せたのではないだろうか。

１）から４）の事例は、漢字の意味推測には、個々の漢字の情報と、助詞などの文法情報をはじめとする構文に関わる情報とをうまく統合する必要があることを具体的に示している。漢字の意味から導き出された単語の意味について、構文情報を利用して修正していくことが必要であり、その逆で、構文情報から導き出された品詞等の情報をもとに漢字の意味から単語の意味を推測していくことも必要であろう。これは Mori の指摘と一致する。

４．考察と今後の課題

学習者の内省報告から漢字語の意味推測過程を観察した結果、漢字の意味的情報が文脈、特に構文情報といっしょに活用されなければ漢字語の意味推測成功が難しいことが確認された。逆に、意味の透明性が低い漢字語であっても、助詞や活用語尾に注目し、構文を正しく把握することで意味推測を成功させられることが示唆された。

今回の調査で、意味推測をする上で必要であった知識は、例えば以下のようなものである。「○○」は推測が必要なターゲットの漢字語を示す。

１）漢字語どうしに挟まれたひらがなを手がかりに品詞を特定すること

例：「Aな○○」のように漢字語Aと○○に挟まれたひらがな「な」を利用し、○○を名詞であると推測すること

２）動詞と一緒に使用される助詞との組み合わせから、その助詞の前に来る意味の範囲を限定すること

例：「○○を訪ねる」の場合、「○○」に来るのは場所である。

３）複数の用法を持つ助詞について、前後の単語からその用法を特定すること

例：「Ａから○○」の場合、Ａが漢字語の場合は「から」が理由を示す可能性が低いことを利用し、Ａと「から」ではなく、○○と「から」とを結びつける。

４）文の構造から、動作主の範囲を限定すること。

例：「(人）の○○がわかる」の場合、「(人)」は「わかる」の主語にはならないことを利用し、○○の意味を推測すること。

このような情報を活用する訓練は、読みの指導に取り入れられるはずである。特に、学習者Ａのように構文情報をうまく活用できない学習者に対しては、上記のような細かい情報を一つずつ解説しながら読む訓練をしていくことで、構文に目を向けることができるようになるのではないだろうか。

また、この他に、意味推測の過程で漢字の意味を選択する際、個人的に優先される意味・語彙に影響され、推測に失敗する場合が多数見られ、漢字の中心的な意味を意識しながら語彙のネットワークを拡大させることの重要性が示唆された。もちろん、漢字１字の意味を取り出すことは容易ではない。例えば、「調理」の「理」の意味を取り出すのは難しく、たとえ「理＝theory」と理解していたとしても「調理」の意味推測とは結びつかない。これは、意味の透明性の低さと関わる問題である。しかし、「調理」の場合、関連語彙として「修理」ではなく「料理」を想起すれば、「(冷蔵庫の中に）調理が必要な食材は入っていない」という文脈の中で「調理」の意味を推測することは可能である。実際、学習者Ｃは学習者Ａ同様「調理」の意味がわからなかったが、「料理」と読み替えて文意を解釈している。つまり、漢字の中心的な意味を意識すると同時に、同じ漢字を含む語をどれだけ想起することができるかも、意味の透明性の低さを補う方略として、重要なのではないだろうか。

本調査から得られた事例はいずれも個別的なものである。しかし、このような情報を積み重ねて蓄積していくことによって、有用な読みの指導の手がかりが得られるはずであり、今後もデータの蓄積を進めていくことが重要であると考える。今後は、文脈のない条件とある条件とを設け、文脈が与えられることによって推測がどのように変化するのかを観察し、統語的な推測を生む文脈情報の役割をさらに詳しく記述する予定である。

本稿は、科研費（19652047）の助成を受けたものである。

参考文献：

桑原陽子（2009）「漢字未知語の意味推測に及ぼす語構成の影響－中上級非漢字系日本語学習者のケーススタディより－」『福井大学留学生センター紀要』第４号，21-30.

小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』　ひつじ書房

日本語教育学会(編)(2005)『新版　日本語教育事典』　大修館書店

松本順子（2002）「日本語学習者の漢字理解に文脈支持が与える影響－英語母語話者の場合－」『日本語教育』115，71-80.

松本順子（2004）「日本語学習者の漢字認識ストラテジーー英語母語話者の場合ー」『言語科学研究第』10, 67-84.

森美子（2004）「語彙推測方略の個人差」『第二言語習得・教育の研究最前線ー2004 年度版ー』14-37.

Mori Yoshiko (1999). Beliefs about language learning and their relationship to the ability to integrate information from word parts and context in interpreting novel Kanji words. *The Modern Language Journal*, 83, 534-547.

Mori Yoshiko (2002). Individual differences in the integration from context and word parts in interpreting unknown kanji words. *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397.

Mori Yoshiko (2003). The role of context and word morphology in learning new Kanji words. *The Modern Language Journal*, 87, 404-420.

Mori Yoshiko & William Nagy (1999). Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

The effects of syntactic information on interpreting unknown Kanji compounds: A study of intermediate and advanced Japanese learners from non-Kanji culture.

KUWABARA Yoko

Keywords: *Kanji* compounds, interpreting unknown word, syntactic information, intermediate and advanced Japanese learners from non-*Kanji* culture

This study investigates the reason for a failure of interpreting unknown *Kanji* compound. Three intermediate and advanced learners of Japanese as a second language read Japanese sentences which included *Kanji* compounds. After reading they explained the meaning of these sentences and the process of interpreting the meaning of the unknown *Kanji* compounds. The learner's reports concerning the way of interpreting the meaning showed that a particle is a helpful clue to understanding the structure of sentences and interpreting the meaning of the sentences, including unknown *Kanji* compounds.